Jour. of Musashi Sociological Society, 26, 33-35, 2024
「ソシオロジスト」（武蔵社会学会），26, 33-35, 2024


# 小川正恭先生の思い出
# ―武蔵大学における社会人類学の守り神

## Memories of Prof. Masayasu Ogawa
## ―Guardian deity of Social Anthropology at Musashi University

朝　倉　敏　夫*

Toshio ASAKURA*

私は 1970 年，人文学部社会学科の二期生として武蔵大学（以下，武蔵）に入学した。大学がまだ学生運動で揺れ動いている時代であった。そんな中，宗教人類学の泰斗であられた古野清人先生のゼミに入った。大学の授業がしばしば休講になることもあり，同じゼミ生の堀江俊一君（後に至学館大学教授）とともに，九品仏にある先生のお宅にうかがい，だされたお茶の話から広がる文化人類学の世界に魅了されていった。

小川正恭先生との出会いは，私が 4 年生になってからである。古野先生がご高齢でもあり，体調をくずされたため，都立大学の博士課程にいられた小川先生が代講に来られた。先生は 1942 年生まれで，私には 8 歳年上のお兄さんのようでもあった。ゼミは，マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』の講読であった。私たちは『世界の名著　マリノフスキー / レヴィ＝ストロース』に収録された日本語版を読んでいったのだが，小川先生は英語版のそれを机の上に開かれていたのが印象的だった。ゼミの発表は，担当者が分担部分の内容を要約するのだが，当時はまたレジュメを青焼きで作成していた。民族誌を読むことの大切さを勉強した。

武蔵を卒業すると，私は明治大学の大学院に，堀江君は都立大学の大学

*滋賀県平和祈念館

院に進学した。74 年に武蔵には松園万亀雄先生が来られ，後輩の穂刈亘君や大柴弘子さん，喜山朝彦君たちが中心となって，社会人類学研究会が作られた。松園先生が横浜国立大学に転職されると，小川先生が武蔵においでになり，研究会の面倒を引き受けてくださり，私も OB として参加させてもらうことになった。

私は 79 年に韓国に行き，韓国語を学び，翌 80 年 10 月から光州の全南大学に籍をおいて都草島においてフィールドワークを行った。82 年 3 月に帰国すると，国際基督教大学の助手となったが，2 年で契約が切れ，いくつかの大学の非常勤講師として暮らしていた。当時武蔵は，80 年に渡邊欣雄先生が来られて，小川先生との二頭体制になっており，私も非常勤講師に呼んでいただいた。武蔵に行くと，毎週のように帰りには小川先生や渡邊先生と研究会の仲間たちと，「川松」という小料理屋での飲み会に通った。

研究会での思い出での一つは，小川先生が委嘱されていた平塚市史の編纂事業に参加させてもらったことである。私たちは, 平塚の旅館に合宿し, 昼間は調査にいそしみ, 夜はお酒を飲みながらバカ騒ぎをしたものだった。

調査といっても, 入会したばかりの一年生のなかには,「姻戚」と「隕石」を取り違え，トンチンカンな話を聞いてくる者もいて，小川先生のお役にどれだけ立てたのかわからない。それでも小川先生は，学生たちの成長をじっくりと見守っておられたようだ。私も含め, 学生たちの楽しみは, もっぱら夜の飲み会にあった。2019 年に，後輩の梅野直樹君から「部屋を整理したら 1985 年 7 月 23 日の平塚民俗調査の映像がでてきた」と連絡があり，DVD にして送ってもらったが，そこには夜の飲み会の様子が映し出されていた。そうした醜態（？）にも，小川先生のまなざしは，やさしくそそがれている。

88 年に私は国立民族学博物館に職を得て，大阪に行った。それからも，

学会などの場所で小川先生にお目にかかることができた。ことに研究会では，1990 年卒の後輩たちの結束力が強く，同窓会が組織され，2007 年 5 月には小川先生を囲む会を開いたり，なにかの機会に集まった。小川先生と最後にお目にかかったのは，2016 年 1 月に開かれた同窓会であった。その年の 3 月に，国立民族学博物館を定年退職した私は，立命館大学に移り，食マネジメント学部の設立に力をそそいだため，学会に顔をだすこともなくなり，その後は小川先生にお目にかかる機会もなくなっていった。2018 年に旧友の堀江君が亡くなり，偲ぶ会が開催されたが，小川先生は体調が悪く欠席され，おめにかかることができなかった。

小川先生には，毎年，年賀状をお出ししていたのだが，ここ何年かはお返事がなかったように思う。最後に，お声を聴いたのは，おととしの 1 月に年賀状へのお礼を電話で受けたときだった。小川先生の口からは，それまでのおだやかな話し方とはちがって，体調の悪さを訴えるような口調であった。

小川先生とはじめて出会って，半世紀が過ぎた。この 50 余年，小川先生とそれほど密度の高いおつきあいはできなかった。しかし，研究地域は異なるものの社会人類学という同じ学問領域を歩んできた私にとっては，その手ほどきを受けた師のお一人であった。小川先生の最終講義は 2012 年に開催されたが，そのタイトルは「社会学と人類学」であった。社会学科のなかで人類学教室を長年守って来られた小川先生は，武蔵において社会人類学の守り神であり，私にとっては「武蔵には小川さんがいてくださっている」という安心感をもたせてくださる方であった。

先生のひょうひょうとしたお姿，物静かな語り口，そして寛容なお心を忘れることはできません。先生のご冥福を心から祈ります。合掌